ルイス・セラーノ・アラルコン氏公開講座（ワークショップ）レポート

伊藤康英（グリーン・タイ ウインド・アンサンブル企画運営責任者）

2018 年 7 月 26 日 18:30〜21:00
於：シルバーマウンテン B1F

海外で人気のスペインの作曲家ルイス・セラーノ・アラルコン氏が、このたび初来日し、洗足学園音楽大学グリーン・タイ ウインド・アンサンブルにてワークショップを行った。

７月に、中国の海南島での吹奏楽フェスティバルに招かれ、そして、８月にはシンガポールにて客演指揮に招かれており、その合間を縫っての来日だった。

なお、「セラーノ」は父方の苗字、「アラルコン」は母方の苗字、両親の姓の両方をとって、Luis Serrano Alarcón がフルネーム。ここでは本人の了承を得て、「アラルコン」と呼ぶことにする。

ルイス・セラーノ・アラルコン氏略歴

1972 年 7 月 30 日生まれ。ヴァレンシア出身の作曲家、指揮者。チバの音楽協会で、作曲法、管弦楽法、ソルフェージュ、音楽理論、初見視奏、移調奏、ピアノ教育法を学んだ。多くの国々で作品は演奏され、スペイン、イタリア、シンガポール、アメリカ、コロンビア、香港などに指揮者として招かれ、多くの国際的な組織より委嘱を受けている。WASBE（世界吹奏楽協会）の理事も歴任。現在はヴァレンシア専門音楽院でアナリーゼと作曲を教えており、9 月からは、ヴァレンシア高等音楽院（Concervatorio Superior de Música de Valencia）にて教鞭を執る。

作品は、スペインのピレス出版社（Piles Editorial de Música）より出版していたが、現在は、自社アラルコン・ミュージック（alarcon music）より出版されている（alarconmusic.com）。

ピアノや声楽、オーケストラなど、多くのジャンルでスペインの音楽は、日本で大いに愛好されている。しかし、スペインの真髄をなかなか表現できるものではない。また、吹奏楽のジャンルでは、スペインの作品はほとんど知られていない。

そこで今回は、アラルコン氏本人の指揮により、自作の表現方法を通じて、スペインの音楽を垣間見る絶好の機会となった。

グリーン・タイ ウインド・アンサンブルでは、去る７月のコンサートでアラルコン氏の「コンチェルタンゴ（Concertango）」第１楽章を、また昨年度は「ドゥエンデ（Duende）」を取り上げ、いずれも日本初演となった。これら２曲を今回は取り上げた。

「コンチェルタンゴ」は、アラルコン氏がピアソラの音楽に没頭していたころの作品であ

り、ピアソラを遥かに凌ぐ情熱を持った作品である。サクソフォーン協奏曲の形態、あるいは、サクソフォーンとジャズのグループ（ピアノ、ベース、ドラム）のセッションをソリストとする協奏曲。タンゴの持つ「ウォーキング・バス」のイメージを大切にするように、そして、ダイナミクスの変化についてのアドヴァイスがあった。決して強い音ばかりではなく、音楽の方向性を考えたダイナミクスの設定が重要である。「ピアソラふうの吹奏楽作品」ともなると、とかく大きな音を出し続けそうになるところが、節度を持ちつつも高揚する音楽づくりが素晴らしかった。

大学４年のサクソフォーンの学生が見事な独奏を務め、アラルコン氏からも賞賛された。

引き続き、「ドゥエンデ」から第４楽章を取り上げ、フラメンコの音楽を学んだ。

フラメンコのリズムやメロディーには各種あるようだが、この楽章は、「ブレリアのテンポで」と書かれており、フラメンコ独特なリズムが中心となっている。フラメンコには欠かせない「パルマス」（手拍子）も織り込まれ、手の叩き方によって音が変わるという指導があった。また、フラメンコには欠かせないギターは、ハープが模している。

アラルコン氏の指揮やアドヴァイスは的確で、英語もわかりやすかった。またアラルコン氏自身の指揮からはスペインの情熱が漂い、学生たちもスペインふうのリズムや音楽を奏でていた。このテイストは、これまでの日本の吹奏楽では聴かれなかったものかもしれない。大変に有意義な時間となった。このような機会をいただけた大学関係者、そして参加してくれたグリーン・タイ ウインド・アンサンブルのメンバーなど多くの方々に感謝します。

学生の感想

その国で生まれたからこそ育まれたリズムの感じ方とか音楽性を学べ、すごく勉強になった。

レイニッシュ先生（注：７月のグリーン・タイのコンサートでの指揮者であり、そこでも「コンチェルタンゴ」を取り上げている）とはまた違った音楽作りだったから、さらにいろんなことを吸収できました。

指導がとても的確でわかりやすかったです。アラルコンさんからまた指導をしていただきたいと思いました。

すごく情熱的な音楽だし、英語もわかりやすい。

アラルコンさんの情熱に動かされるものがあった。またご指導いただくことで、ぼくらに足りないスペイン独特のリズム感がもっと身につくんじゃないかと思いました。

写真

（上）「コンチェルタンゴ」を演奏する学生（学４）とアラルコン氏
（下）モデルバンドとなったグリーン・タイ ウインド・アンサンブルとアラルコン氏

（上）「ドゥエンデ」演奏中にフラメンコの「パルマス（手拍子）」を叩く打楽器の学生
（下）終了後に全員で。学生たちは、アラルコン氏の指導を大変に嬉しく感じたようだ。また、アラルコン氏自身も、大変に良い機会を得られたと満足されていた。